

**著書紹介 益岡隆志, 大島資生, 橋本修, 堀江薫,  
前田直子, 丸山岳彦 編 『日本語複文構文の研究』**

著者	丸山 岳彦
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	5
号	1
ページ	49-51
発行年	2014-06
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000769">http://doi.org/10.15084/00000769</a>

益岡隆志, 大島資生, 橋本修, 堀江薫, 前田直子, 丸山岳彦 編

『日本語複文構文の研究』

2014年1月 ひつじ書房 A5判 736ページ 9,800円+税



丸山 岳彦

### 1. 共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」の概要

本書は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」(独創・発展型, リーダー: 益岡隆志) の成果報告書として刊行するものである。まず初めに, この共同研究プロジェクトの概要を説明しておく。

本プロジェクトは, 国立国語研究所理論・構造研究系のプロジェクトの1つとして, 2010年11月から2013年10月までの3年間実施された。その活動の目的は, 益岡(2013)で以下のように述べられている(p.75)。

日本語の文の研究は, 単文の研究の進展状況に比べ複文の研究の進展は必ずしも十分なものは言えない。複文の研究はそれだけ発展の余地を残しているということである。本プロジェクトの目標は, 複文研究における展開の可能性を追究することである。

本プロジェクトの特色の1つは, 研究の幅広い展開可能性を意図して, 国立国語研究所の研究系を反映する形で4つの班を設定したことである。すなわち, 連用複文構文・連体複文構文という2種類の複文構造に関して理論的・実証的研究を行う「連用複文・連体複文班」, 複文構文の歴史の変異を扱う「文法史班」, コーパス言語学の観点から複文研究に取り組む「コーパス言語学班」, そして言語類型論・対照言語学の観点から複文構文にアプローチする「言語類型論・対照言語学班」の4つである。これらの各班は, 国立国語研究所における4つの研究系(理論・構造研究系, 時空間変異研究系, 言語資源研究系, 言語対照研究系)に対応する。プロジェクトを構成する共同研究者は5名で, 大島資生(首都大学東京)・前田直子(学習院大学)が「連用複文・連体複文班」を, 橋本修(筑波大学)が「文法史班」を, 丸山岳彦(国立国語研究所)が「コーパス言語学班」を, 堀江薫(名古屋大学)が「言語類型論・対照言語学班」を, それぞれ担当した。

3年間の活動期間中, 研究集会として研究発表会を5回, ワークショップを1回, シンポジウムを1回, 全国各地で開催した。発表件数は合計35件を数え, 共同研究者に加えて各地の大学における研究者の方々を巻き込みながら, 日本語の複文構文に関する多様な観点からの研究発表が行われた。

## 2. 本書の目的と構成

先にも述べたように、本書は、共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」の成果報告書である。複文の総合的な研究をめざすというプロジェクトの基本方針に従って、日本語の複文構文を総合的・多角的な観点から記述することを目的とする。

執筆は、共同研究者のほか、各研究集会での発表者・講演者を中心に依頼した。また、本プロジェクトの研究体制を反映する形で、全体を4部構成とした。各部の構成と、全執筆者の氏名を、以下に示す。括弧内は各部に収録された論文数を表す。

第1部「連用複文・連体複文編」(7編)

第2部「文法史編」(6編)

第3部「コーパス言語学・語用論編」(5編)

第4部「言語類型論・対照言語学編」(6編)

天野みどり、井島正博、岩田美穂、江口正、大島資生、大堀壽夫、加藤重広、金廷珉、下地早智子、高橋美奈子、高山善行、坪本篤朗、長辻幸、橋本修、蓮沼昭子、福嶋健伸、堀江薫、前田直子、益岡隆志、松木正恵、松本善子、丸山岳彦、宮地朝子、米田信子

(50音順、敬称略)

さらに、各部の冒頭には、当該の研究領域に関する最近の動向や今後の課題についてまとめた解説論文を配置した(執筆は各班を担当する共同研究者が行った)。これによって、合計28編の論文を収めた、ボリュームのある論文集となった。なお、第3部が「コーパス言語学・語用論編」となっているのは、本プロジェクトの構成班では明示的に位置づけられなかった語用論に関連する論文を、コーパス言語学班の研究成果の一部として収録したことによるものである。

## 3. 本書の意義

冒頭に引用した益岡(2013)でも述べられているように、日本語文法における複文研究の進展は必ずしも十分でなく、これからの発展可能性が大いに期待される分野である。本書に収められた論文群からは、複文構文が多様な観点からアプローチできる研究対象であることを、多くの実践例とともに読み取ることができる。古くは三尾(1942)や三上(1953)、南(1974, 1993)などによって展開されてきた日本語複文構文の研究が、本書で示されたように、今後ますます方向性を広げながら展開していくことを願いたい。

### ●参照文献●

益岡隆志(2013)「複文構文プロジェクトにおけるいくつかの話題」『国語研プロジェクトレビュー』4(2):75-81.

三上章(1953)『現代語法序説』東京：刀江書院。

南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京：大修館書店。

南不二男(1993)『現代日本文法の輪郭』東京：大修館書店。

三尾砂(1942)『話言葉の文法 言葉遣篇』東京：帝国教育会出版部 [復刊 1995年 東京：くろしお出版]。

### 丸山 岳彦 (まるやま・たけひこ)

国立国語研究所言語資源研究系准教授。博士(学術)(国際基督教大学)。

主な著書・論文：『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析(『日本語文法』14(1), 2014), 『コーパス入門』(共著, 朝倉書店, 2013), 『はじめて学ぶ日本語学』(共著, ミネルヴァ書房, 2011), 『言語処理学事典』(共著, 共立出版, 2009), 『時間の中の文と発話』(共著, ひつじ書房, 2007)。

社会活動：日本語文法学会学会誌委員, 言語処理学会評議員。